

# 息のできる場所

作：鈴木麻名実

《登場人物》

才川 玲司  
真鍋 咲希  
折笠 直輝  
折笠 彩  
才川 瑠美  
東郷 剛士

《設定》

才川玲司を双極性障害Ⅱ型。ラピッドサイクラー。ハイパーグラフィア。  
才川瑠美を双極性障害Ⅰ型。寛解状態。  
真鍋咲希の母・りさを双極性障害Ⅱ型。

第一幕 (十二月十三日)

第一場

正午。玲司の家。

仕事部屋にはデスクと椅子、ローテーブル、ゴミ箱と必要最低限のものしか置かれていない。まさに殺風景な部屋である。

そこに、ボサボサと伸びた黒髪に無精ひげ、ダボつとした部屋着を着ている玲司が、デスクに向かい、一心不乱に原稿用紙に鉛筆を走らせている。

その様子はまるで何かに憑りつかれているかのようで鬼気迫っている。目も大きく見開かれ、血走っているように見える。

デスクの周りには、原稿用紙が大量に散らばっている。

玄関のチャイムが鳴る。

が、玲司は気付く様子もなく、ただひたすらに鉛筆を走らせ続ける。

暫くして、ガチャリと玄関の鍵を開ける音。

咲希が郵便物に目を通しながらリビングに入ってくる。

ワンピースの上にトレンチコートといった格好。いかにも仕事が出来そうな雰囲気である。

郵便物を確認し終えると、それをテーブルに置き、脱いだコートと鞆を椅子に置く。

仕事部屋の扉をノックする。

玲司、これにも気付くことなく、なおも書き続ける。

何も反応がないことを確認した後、仕事部屋に入る咲希。部屋の中を見て、溜め息。

咲希、玲司のすぐ側に寄り、玲司と原稿用紙を覗き見る。

なおも気付かない玲司。

咲希、慣れた様子で散らばった原稿用紙を拾い集めていく。すると、その下から女もののピアスが出てくる。

咲希、ピアスを手に取り一瞬眺めるが、すぐに原稿用紙と一緒にローテーブルの上に置く。

そして、いきなり玲司の手から鉛筆を奪う。

玲司、鉛筆が無くなった手元を見る。

咲希

(両手で玲司の髪の毛をくしゃくしゃにしながら) はい、戻る〜!

玲司、ゆっくりと咲希の方を見る。目はまだぼんやりとしている様子。

咲希 (再度玲司の髪の毛をくしゃくしゃにして) 玲司くん、戻るよ。戻るよ。

玲司 ……何？

咲希 (玲司の顔を両手で挟み、自分の方に向け) おかえり。

玲司、血走っていた目が徐々に落ち着いていく。

玲司 ……おう。

咲希 ひどい文書してるけど、いつから書いてるの？

玲司 ……火曜から？

咲希 ……。

玲司 ……今日何曜日？

咲希 木曜日。

玲司 おー、マジか。気付かなかった。

咲希、キッチンに向かう。

薬とペットボトルの水を手にして戻ってくる。

咲希 薬、飲んでないでしょ。

玲司 そういや飲んでないわ。

玲司、薬を飲む。

咲希 ……早めに帰ってこれて良かった。

玲司 そういや早いな。明日の夜じゃなかったっけ、帰ってくるの。

咲希 向こうの都合だね。てかさ、来るのが明後日になったら、何日薬飲み忘れることになっただけかな？

玲司 大丈夫だって。たかが数日。

咲希 数日ってさ、四日だよ。四日。この前は三日飲まなかっただけで、動けなくなってたよね？

玲司 そうだったっけ。

咲希 そうです。そのあと離脱症状と副作用で、一週間もまともに動けなかったですよね？

玲司 ……毎日飲んだら飲んだで調子出ねーんだよ。

咲希 ……。

玲司 いや、書くのにはその方が調子良いんだって。軽く躁になってる位のが書けるし。

玲司 それが危ないんじゃないよ。

玲司 大丈夫だって。最近はコントロールできてるし。それにいざとなったら、咲希ちゃん  
がいてくれるし。なっ？

咲希 ……。

玲司 何？

咲希 都合いいなーって思って。

玲司 何で？

咲希 玲司らしいけど。

玲司 だから何？

咲希 ……玲司、また女連れ込んだでしょ。

玲司 はっ？ 連れ込んでないし。

咲希 別に隠すことないじゃん、いつものことだし。てか、私別に彼女でもないんだし？

玲司 いや、マジで。

咲希 落ちてたよ、あれ。

玲司 あれ？

咲希 ピアス。

玲司 (ピアスを見て) あー、忘れてた。

咲希 忘れてた？

玲司 うん、忘れてた。そういやあった。

咲希 ほー。

玲司 いや、やらなかったからさ。

咲希 え、してないの？ 部屋連れ込んでいて？

玲司 いや、連れ込んでないし、向こうが勝手にしてきただけだし。

咲希 それどっちでもいいし。玲司がやらないわけないでしょ、女連れ込んでいて。

玲司 俺だってやらないときもあるって。

咲希 えー。…あ、わかった。やろうと思ってたけど、浮かんじやっただ。そのパター  
ンだ。

玲司 さっすが咲希ちゃん、わかってるねー。

咲希 なるほどねー。

玲司 何？

咲希 わざわざピアス置いてくって、どんな女かと思ったんだけど、そういうことか。  
は？

咲希 いや、ピアスキヤッチ、きちんとピアスについてるからさ。明らかにわざとでしょ。  
玲司 「私のプライド傷付けやがって！ 他の女とバチバチなりやがれ！」 ってことだよ。  
咲希 いや、意味わかんねーいし。  
玲司 しかも寝室じゃなく仕事部屋に置いてくって。ホント面倒な女連れ込んだねー。  
玲司 ー。ご愁傷様ー。  
咲希 だから、意味わかんないって。  
玲司 いい？ ピアスキヤッチがついてなかったら、いつの間にか外れてましたってのも  
咲希 わかるよ？ これがきちんとしてるってさ、自分でつけなきゃなわけじゃん。つま  
玲司 りだよ、自分の意志で置いてくわけだ。「痛い目みやがれ！」 って。ま、見つけたの  
玲司 が私だったから、彼女の思惑通りにはならなかったけど？  
咲希 めんどくせーなー。  
玲司 女は大抵、面倒な生き物なんです。  
咲希 つーかさ、やらなかったのは俺の優しさでもあるわけよ。  
玲司 は？  
咲希 やりたくないときにやらない方がいいだろ？ 適当にすんのは失礼じゃん、女性に  
玲司 対して。  
咲希 適当なセックスして、この男下手だなんて思われるのが嫌なだけでしょ。  
玲司 違うし。しよーがないんだって、浮かんじやつたんだからさ。書かないと。浮かんた  
咲希 のにやつても集中できないし。楽しくないし。  
玲司 ほんつと、くそな男だよねー。  
咲希 おー、知ってる知ってる。ま、そのくそな男を好きなお前もどうかしてるけどな。  
玲司 ホントにねー。  
咲希 物好き。  
玲司 ねー。何でこんな男が好きなのか、自分でも謎だわ。  
咲希 難儀な女だなー。  
玲司 そうなの。仕事まで手伝ってさ。こんな都合の良い女、そういないと思うもん。  
咲希 自分で言うかよ。  
玲司 うん、言う。  
咲希 あっそう。  
玲司 もっと感謝されてもいいと思うんだな。  
咲希 感謝してる感謝してる。  
玲司 (じとつと玲司を見る)  
咲希 ……なに、したいの？  
玲司 は！？  
咲希 (咲希を押し倒して) 今なら俺、集中できるよ。  
玲司 ばかなの！？  
玲司 バカと天才は紙一重っていうしなー。

（押し戻して）私、そういう気分じゃないし。それに、もうそういうことしないから。  
玲司 なんだよ、つまんねーの。  
咲希 つまなくて結構です。……これ、何用に書いてたの？  
玲司 特に決まってるない。  
咲希 ホント、急に書きたくなっただんだね。  
玲司 だからそう言ってるだろ。  
咲希 （原稿用紙を手に取り）使えるところはあると思うけど……これ、打ち直しする？  
玲司 おー、頼むわ。  
咲希 はいはい。って、並べるの手伝ってよ。こんな量大変なんだから。  
玲司 眠いから無理ー。つか、めんどくさいし。  
咲希 ほー。こんなばら撒かなきゃ面倒なことにもなりませんけどね。  
玲司 いやー毎度毎度大変だよな、咲希ちゃんも。  
咲希 どの口が言うかな。  
玲司 いつも感謝してまーす。  
咲希 つたく、まあいいけど。この後仕事ないから、ここでちょっとやってくね。  
玲司 おー。  
咲希 書きたいの書くのはいいけど、原稿落とすなよー。  
玲司 ……あつ。  
咲希 何？  
玲司 そういや「睡蓮」の締め切りあったわ。  
咲希 いつまでの？  
玲司 今日。  
咲希 はっ！？ え、何？ 短編？ 中編？  
玲司 連載。次の号から始まんの。  
咲希 え、今どの位書き終わってるの？  
玲司 まだ書き始めてないんだな、これが。  
咲希 書き始めてないって！ プロットは？  
玲司 全然。いやー、すっかり忘れてたわ。  
咲希 あのねー。  
玲司 まあ、構想はあるし、いけるって。  
咲希 編集者泣かせ。  
玲司 いやいや、俺なんてマシな方だつて。ギリギリタイムリミットにはいつも間に合わせるし。リリーさんなんか連載、何ヶ月休んでるか。「筆者都合により休載します」つて、それで連載もつてる位だからなー。マジ尊敬するわ。  
咲希 リリーフランキーさんは小説だけ書いてるわけじゃないでしょ。小説しか書いてない玲司とは話が変わります。……つたく。担当、直輝くん？  
玲司 そー。

咲希 直輝君だからって後回しにするのやめなよ。納期ギリギリに、いつつも駆け回って、  
残業させてさ。もう、かわいそう。  
玲司 大丈夫だって。それがあいつの仕事なんだし。  
咲希 甘えすぎ。  
玲司 いーの。俺と直輝の仲だし。……マジで寝るわ。  
咲希 ……そう。おやすみ。  
玲司 おー。

咲希、原稿用紙を順番に並べていく。  
玲司、寝室に向かっていた足を止め、咲希を見る。  
間。

玲司 咲希。  
咲希 何？ 眠剤飲む？  
玲司 寝よ。  
咲希 ……寝ない。さっきも言ったでしょ。もうそういうことするつもりないから。

玲司、咲希のもとに戻り、キスをしようとする。

咲希 (玲司を押し返して) しないって言うてるでしょ。  
玲司 咲希。  
咲希 しないから、ほんと。

玲司、もう一度咲希にキスをする。

玲司 ほんと？  
咲希 ……。

咲希、自分から玲司にキスをする。

咲希

ベットで。

玲司、意地悪く笑う。  
暗転。

## 第二場

午後二時頃。玲司の家。

玄関のチャイムの音が鳴る。  
間。

再度チャイムの音。

咲希、スリッパ姿で、寝室からバタバタとリビングに出てくる。

咲希 直輝くん！？

直輝 (玄関の外から) はい。

咲希 ごめん、ちよつと待って！ (寝室にバタバタと戻りながら) 玲司、直輝くん来た！

玲司 (寝室から) 何、もうそんな時間？

咲希 (寝室から) そんな時間！ あ、服取って！

玲司 (寝室から) 何そんな慌ててんの？

咲希 (寝室から) 慌てるでしょ！ あーもう、寝すぎた！

玲司 (寝室から) やっちゃったねー。

咲希 (寝室から) 誰のせいよ！ ったくもー。

寝室から身なりを整えた咲希が出てくる。玄関のドアを開ける。

直輝が部屋に入ってくる。ベージュのチノパンに、上にはジャケットを羽織っている。

爽やかな、いかにも好青年といった風貌である。

直輝 咲希ちゃん、おはよ。

咲希 おはよう。ごめんね、すぐに出れなくて。ちよつと手が離せなくて……。

直輝 大丈夫だよ。玲司、寝てんの？

咲希 さっき起きたから、もう少ししたら出てくると思う。

直輝 そっか。

咲希 座って待ってて。

直輝 うん。

咲希 コーヒー飲むよね。

直輝 ああ、うん。

咲希、お湯を沸かしにキッチンに向かう。  
直輝、咲希がキッチンに行くのを見届けてから、椅子に座る。  
リビングに戻ってくる咲希。

咲希 玲司、まだプロットもできてないみたい。

直輝 プロットも？

咲希 直輝くんだからって甘えすぎだよね。

直輝 甘えてるかどうかはわからないけど、後回しにはしやすいだろうな、二十年以上の付き合いだし。にしても、締め切り日は余裕持つて言っておいたけど、プロットもまだか。はー、また印刷所に頭下げなきゃだな。

咲希 大変だね、ほんと。

直輝 いや、連絡取れなくなる作家さんもあるからね。玲司はまだつかまるからいい方だよ。

咲希 そっか。いるんだね、やっぱ。そういう作家さん。

直輝 この前も連絡取れなくなった作家さんがいたんだけどさ、ビジネスホテルに隠れてて。

咲希 随分近場だね。

直輝 ね！ 「香港とか温泉くらい行け！」って皆で怒ったよ。

咲希 それ、怒るとこ違うくない？

二人が談笑しているところに、寝室から出てきた玲司登場。

咲希、玲司に目をとめると、キッチンに向かう。

玲司 おー、直輝ー。

直輝 玲司……。おー、じゃないだろ。プロットもできてないって聞いたけど。

玲司 いやー、すまんすまん。

直輝 ちつとも思っただろ。

玲司 だって意味ねーし、プロットなんて作っても、どうせ書いてる内に変わってくんだから。

直輝 ……。

玲司 十日後にはあげっからさ。

直輝 十日後って、二十三日？ 今回は年末進行だから、それじゃ間に合わないな。校閲もできないし。

玲司 書いてったの咲希にやってもらおうから大丈夫だよ。

咲希 (キッチンから) ちよつと巻き込まないでよー。

玲司 お、さすが咲希ちゃん。きちんと聞いてんの。  
直輝 玲司、咲希ちゃんに迷惑かけるなよ。(手帳を確認して)二十日までな。そしたら二十一日校閲頼めるし。玲司、一週間あればいけるだろ。  
玲司 まあ、いけなくはないけど。  
直輝 じゃあ二十日、絶対あげろよ。  
玲司 めんどくせーなー。なんで締め切りなんてあんだよ。  
直輝 締め切りがないと書かないだろ。  
玲司 書きたいもんは書くって。  
直輝 ああ言えばこう言う……。  
玲司 大体さ、なんの仕事もできないから作家になったんであつてさ、そんな人間が締め切りきちんと守るなんて方がすごいって。  
直輝 開き直るなよ。  
玲司 咲希、まだー。  
咲希 (キッチンから)あと十秒ー。  
直輝 ……。  
玲司 ……何? どした?  
直輝 いや、なんでも。

咲希、コーヒーを持ってくる。

咲希 お待たせしました。直輝くん、確かブラックだったよね?  
直輝 うん、そう。ありがとう。  
咲希 いいえー。  
玲司 俺のどっち。  
咲希 こっち。  
直輝 あれ、玲司コーヒー飲むつけ?  
玲司 (コーヒーを飲む)にがつ!  
咲希 本当はこっちでしたー。  
玲司 はっ!?  
咲希 これね、殆どコーヒー牛乳だから。スティックシュガー四つも入ってるの。  
直輝 ああ。  
玲司 おい、咲希!  
咲希 ……締め切り待ってもらうのにあの態度はいただけないなー。  
玲司 ガキみたいな嫌がらせすんなよ。  
咲希 ガキみたいな味覚をお持ちなのはどちら様かしら?

玲司 頭使うから糖分が必要なんだよ！  
咲希 そうだよー、今から頭使うのには糖分とらなきゃね。すぐにやる気になるなんて、さすが玲司！  
玲司 あんなあ。  
咲希 もっと砂糖足そっか？  
玲司 わかったから。きちんと書くって。  
咲希 ……  
玲司 きちんと書きます。  
咲希 よろしい。  
直輝 さすがだね、咲希ちゃん。  
咲希 そんなことないよ。でも、直輝くんは優しすぎ。たまにはビシッと叱ってやってよ。わかった。  
直輝 うん。  
咲希 ま、原稿は一週間後あげてもらおうとして、今日は話してもあつてさ！  
直輝 話し？ あつ、私、外そっか？  
咲希 ううん、大丈夫。ていうか、二人とも今日何の日か忘れてる？  
玲司 ……つーか、今日何日？  
咲希 十三日だけど…あ、今日か、芥川と直木の候補者出る日！ え、出たの！？  
直輝 出たよ。直木賞入った！  
玲司 ま、当然だな。  
咲希 「屍の蜜」！ あれ良かったもんね！ 入ると思ってたけど、出るまではわからないもんね。  
直輝 まあね。  
咲希 結果いつ出るの？  
直輝 一月一六日。だからその日は空けといてな。  
玲司 おー。  
直輝 咲希ちゃん、待ち会来る？  
咲希 え、いいの？  
直輝 もちろん。  
玲司 なんて来んだよ。部外者は邪魔だろ。  
直輝 ライターの仕事としてさ。新聞記者とかも来るし、最近はライターが参加してるところもあるから。ウチで書いてくれる咲希ちゃんの記事、好評なんだよ。この前も同僚が「真鍋さんの記事いいな」って言ってたし。だから仕事として。  
咲希 了解！ しつかり仕事させて頂きます！  
直輝 うん、こちらこそよろしく。  
玲司 待ち会なんて、ちつとも面白くもねーのに、お前も暇人だなー。  
咲希 今の話聞いてた？ 私、仕事で行くの。暇とかじゃありませんから。それに私がいた

方が気楽でいいと思うけど？  
何でだよ？

電話待ってるまでの時間！ 空気が張りついてき、待ってるだけなのに神経すり減  
つてくみたいいな。芥川賞のときもあつたでしょ？ 玲司ああいうの好きじゃないじ  
ゃない。

まあ確かに。

玲司 咲希ちゃん、待ち会参加したことあるの？

咲希 あー、前にライターの仕事で、ある作家さんの待ち会参加させてもらったんだよね。  
直輝 そうだったんだ。

咲希 うん。

玲司 お前、ほんと色々やってんのな。

咲希 そうなの、色々出来ちゃうからさ。引つ張りだこよー。

玲司 はいはい。

直輝 いや、咲希ちゃん凄いいんだぞ、ホント。幅広くって。この前「アンアン」でも書いて  
たでしょ、あれすごい面白かったよ。クスッと笑えちゃってさ。

咲希 ホント？

直輝 うん。ああいう系統ならウチの女性誌とかにもいいしさ。咲希ちゃんのこと言ってお  
くよ。

咲希 ありがとう。

直輝 待ち会の記事だけど……つてごめん、話脱線してたね。前にも参加したことあるなら、  
大体のことわかるよね？

咲希 うん。場所とか決まったら教えて。

直輝 了解。記事のことについては、今度改めて依頼するからそのときに詳しくってことで。  
咲希 よろしくお願いします。

直輝 こちらこそ、よろしくお願いします。玲司、当日だけど、十六時に迎えにくるからそ  
れまでに支度しとけよ。

玲司 おう。

電話の着信音が鳴る。

咲希 あ、ごめん、私だ。……瑠美ちゃんから。  
玲司 げっ。

（電話に出る）もしもし、瑠美ちゃん……随分陽気だね……今？ 今、玲司の家にい  
る……これから？ ……別にこの後は特に予定はないけど……え、彩も来るんだ……  
…わかった。いつものところでもいいんだよね？ ……おっけー。じゃあまた後で。（電

話を切る)

直輝 瑠美さん、何だって？

咲希 これから飲もうって。

玲司 こんな時間から良いご身分だな。

直輝 彩も来るんだ？

咲希 来るみたいだけど、大丈夫かな。この前会ったとき、すごいつわりしんどそうだったし。

直輝 俺も暫く会ってないんだけど、外に出れる位になったのかな。

咲希 かな？

直輝 今度、様子聞かせて。俺が連絡とつても返さないからさ。

咲希 うん。じゃあ、私行くね。瑠美ちゃん、待たせるの悪いからさ。

直輝 ははっ、そうだね。

玲司 咲希、原稿！

咲希 あ、ごめん、すっかり忘れてた！

咲希、カップを一つ手にしキッチンに片付けに行く。その後仕事部屋に入る。

直輝 原稿って、何のやつ？ 他のとこ？

玲司 いや。書きたくて書いたやつ。

直輝 あのなー、書きたいの書くのはいいけど、先に仕事としてあるやつを書いてくれよな。

玲司 ごめんごめん。

直輝 ま、一週間後にあげていってくれば良いけど、それより、それでまた咲希ちゃんに打ち直し頼んだのか？ 俺もやるのに。

玲司 でもハイパーグラフィア状態だったから、字読めないぞ？

直輝 あー。あれ見たことあるけど俺には読めなかったな。咲希ちゃん、あれよく読めるよな。

玲司 ほんとになー。俺、自分でも読めないところある位だし。まじすげーよな。

直輝 ……ま、出来たら、俺に見せろよ。玲司が仕事としてじゃなく書く小説なんて久し振りだろ。

玲司 講英社で出せるかわかんねーだろ。

直輝 才川玲司の作品なら、ウチはいつだって出すって。というか俺が何何でも出す。

玲司 ははっ、ホント頼もしいよ、直輝は。

咲希、リビングに戻ってくる。

咲希　じゃ、私今度こそ行くね。直輝くん、また！  
直輝　うん、また。二人によろしく言っておいて。  
咲希　うん。玲司、きちんと書きなさいよ！  
玲司　はいはい。  
咲希　一週間後あげてなかったら、この原稿の打ち直ししないから。  
玲司　わかったよ、きちんとやるって。  
咲希　そんなわけで直輝くん、一週間後報告してね。  
直輝　わかった。  
咲希　じゃあね！

咲希、玲司宅を出る。

玲司　そういや、他って誰候補あがってたんだ？

直輝　あー、ゆずきあさこ柚木麻子先生と、はせせしゅう港かなえ先生、それに馳星周先生に、かが　みさき先生――

玲司　かが　みさき！？

直輝　びつくりした。何、玲司、かが先生がどうかしたのか？

玲司　かがって、「追憶の海」書いたかが先生だよな！

直輝　ああ、長いこと文壇から離れてたけど、久し振りに書いたらしくて「睡蓮」に載ったんだよ。

玲司　まじで！？　え、つーか、直木賞の候補に入ったってことは、かが先生、大衆小説書いたのか！？

直輝　いや、どちらかというところ中間小説かな。俺もびつくりしたよ。かが先生、純文しか書いてなかったし。

玲司　だよな。

直輝　小説らしい小説って感じだったよ。

玲司　うわ、なんかショックだな。

直輝　玲司だって今は中間小説書いてるだろ。

玲司　まあ書いてるけどさ。

直輝　でも、かが先生の言葉の選び方とか、情景の書き方とかは、相変わらず繊細で独特の鋭利さもあってさ。あの比喻表現はかが先生ならではのだよな。久し振りにかが先生の作品読んだけど、読み終わった後あの世界観からなかなか抜け出せなかったよ。

玲司 まじか！ ウチにその号の「睡蓮」あるかな？ すげー読んでー！ いや、でも結果出る前に見るのはな。

直輝 面白かったよ。

玲司 うわー、くそ読んでえな！

直輝 読めまばいいだろ。

玲司 いや、なんか勿体ない気がする。

直輝 勿体ないって。でも、読んだらびつくりするかもな。以前の作品とはまた違うから違う？ 中間小説になったからとかじゃなくてか？

直輝 それもちろんあるけど。そうだな、以前の作品は切々と訴えてくるものが大きかったけど、今回の作品はそれもありつつ、女性的な温かさも感じられたっていうか。へー。

玲司 にしても知らなかったよ。玲司がそんなにかが先生の作品が好きだったなんて。あの人はすごいよ。俺、「追憶の海」読んで小説書いてみようって思ったからさ。

直輝 ああ、前に言ってた先生ってかが先生のことだったんだ。

玲司 おー！ やばいな、こんな結果出るの楽しみないな。

直輝 俺は玲司の「屍の蜜」負けてないと思うぞ。その位あの作品は良かったよ。

玲司 あー、俺的には納得しきれないところあんだけどな。

直輝 純文として書けなかったからだろ。それはこっちの要望だったんだし。それに、純文だったら直木賞のノミネートに、そもそも入らないだろ？

玲司 確かになー。

直輝 俺も玲司の作品は純文のが好きだけさ。

玲司 まー、しょうがねーよな。純文はなかなか売れねーし。わかりやすく書く方が読者は喜ぶってな。

直輝 純文が好きなたちもいるけどね。

玲司 いるつつつても少ねーだろ。

直輝 ……まあな。

玲司 でも、直木賞とかそんな金入らねえし、別にこだわってもなかったけど、今回取れたらやべえな。

直輝 名誉ある賞なのに、そんなこと言って。

玲司 だって稼げねえだろ。ミステリーとか推理とかの賞は賞金一千万とか出んのに、芥川直木なんて一〇〇万だぜ。今は芥川直木取ったって、そんな売れねーしき。読者は名誉ある賞より本屋大賞取った本のが買うし。あんときの印税が一番おいしかったよ。

直輝 まあ、否定はしないけど。

玲司 いや、でも、今回は取りてえなー！

直輝 今回はベテラン勢が多いからね。かが先生は今回がはじめてのノミネートだけど、他は過去にノミネートされたことのある先生達だけだし。馳先生なんて今回で七回目のノミネートだからな。正直全然わからないね。

玲司 ま、当日が楽しみだな。

直輝 ああ。

玲司 (立ち上がって) うっし。やる気出てきた！ ちよっくら書くわ！

直輝 お、それは良いな。

玲司 五日後にはあげてやるよ。

直輝 助かる。

玲司 おう。

玲司、仕事部屋に向かう。

電話の着信音。直輝、電話に出る。

直輝

……編集長、お疲れ様です。今、才川先生に伝えたところで……夕方ですか？ 空いてますが……十八時二十五分？ 随分細かいですね……わかりました、では後程伺いますので……はい……。

直輝、電話を切る。

直輝

(眩くように) 直木賞か……。

暗転

### 第三場

喫茶店。テーブルを囲む、瑠美、咲希、彩。  
瑠美、派手な色合いの服をセンス良く着こなしている。何も発せずとも、どこか豪快さが垣間見える。

彩、優しい色合いのニットのワンピースを着ている。そのお腹は大きく、妊娠している（七か月目位）。見た目はとても清純そうに見える。  
テーブルの上には、ノンアルコールのシャンパンが置いてある。

瑠美　それでは！　私、才川瑠美の離婚成立を祝って！　かんぱーい！  
咲希・彩　かんぱーい！

三人、グラスを軽くぶつけ合う。

瑠美　（飲んで）ノンアルコールもそこそこ美味しいな！

彩　ありがとうございます、合わせてもらって。

瑠美　何言ってるの！　一緒に同じもの飲みたいじゃーん。それに、大丈夫！　あとでしこたま飲むから！

咲希　しこたまって。

瑠美　咲希ちゃんはもちろん付き合ってくれるでしょー？

咲希　えー。

瑠美　傷心してる瑠美ちゃんを前に、咲希ちゃんったら冷たい！

咲希　はーい。今日はとことんお付き合いします。

瑠美　そうこなくっちゃ！　いやー、それにしてもマジで疲れた！　もうさ、結婚するより離婚する方が数倍大変！

彩　お疲れ様です。

咲希　お疲れ様ー。でもびっくりしたよ。一週間前に会ったときはまだかかりそうって言うてたから。一気に話し進んだんだ？

瑠美　まあねー。

彩　良かったんじゃないんですか？

瑠美　いや、結局金だったんだなって思ってた。わたしや、悲しくなったよ。

咲希　お金？

瑠美　そー。もうめんどくなくなつてさ。財産分与とかちよつと揉めたから、土地も家も車も全部いらないうつて言ったら、あれよあれよと話し進んだわ。

彩　うわー。

咲希　マジで？

瑠美　マジで。

咲希　え、でもあの家つて二人でお金出したんじゃないかなかつたつて、瑠美ちゃんの仕事場としても使うからつて。

瑠美　そうなんだよねー。結構防音とかしつかり作ったし、気に入ってたんだけどねー。

彩　あそこ私も居心地良くて好きだったんだけどな。なんか残念ですね。

咲希　あ、そっか。彩も仕事で行つてたのか。

彩　そうそう。

瑠美　あーもうめんどくさいわー。追い込み時期だつてのに、今月中には出なきゃでき。

咲希　今月中！？

彩　あと二週間位しかないじゃないですか。この年末、探すの大変ですよ。

瑠美　いやさ、それが自分で出てくつて啖呵きつちやつてさー。

咲希・彩　あー。

彩　やつちやいましたね。

瑠美　やつちやつたねー。でもついカツとなつちやつてさ、勢いで言つちやつたのよー。まあ頑張つて探すわ。

咲希　私も知り合いの不動産屋さんに聞いてみるね。

瑠美　ありがとー咲希ちゃん！　マジ神だわー！

咲希　瑠美ちゃんにはいつもお世話になつてるから。

瑠美　ほんと、玲司とは大違い！

咲希　いやいや。あ、そうだ、さつき玲司のところで直輝くんに会つたんだけど、二人によるしく伝えといてつて。

瑠美　相変わらず真面目くんだね、直輝くんは。

彩　真面目すぎてつまらないですけどね。

瑠美　きょうだいでほんと全然違うよね。

彩　ですね。

咲希　そうそう！　玲司、直木賞の候補に入つたんだよ！

彩・瑠美　え？

彩　前に出たやつ？　屍の……なんだっけ？

咲希　「屍の蜜」！

瑠美　さすが私の弟！

咲希　ね！　ホントさすがだね！

瑠美　まあ私、あいつの作品、そんな好きじゃないんだけどさ。

彩　え、そうなんですか？

瑠美 うん。なんていうか、陰鬱が前面に出すぎててさ。まあ、あいつらしいっちゃらしいけど。

咲希 私は好きだよ、玲司の作品。

瑠美 咲希ちゃんは玲司に甘いところあるからなあ。

彩 確かに。

咲希 そんなことないよ。良い作家だよ、才川玲司は。

彩 最近はこちらと線引きしてるの？

咲希 ……してただけだ。まあ、やらかしてしまったよね。

彩 はっ？ いつ？

咲希 ……今日？

瑠美 わーお、タイムリー。

咲希 いやでもね、今回は五か月ももったよ！ すごくない！？ 最長記録！

彩 前は三か月だったもんね、確かに延びたねー。すごい。わかってますよ。わかってます！

咲希 咲希ちゃんさ、あいつのどこがいいの？

瑠美 私もなんでだろって思うよ。

彩 自分の弟だけだし、あいつの良いところ全然出てこないんだけど、私。ま、いい男ではないですね。

瑠美 顔だって普通だしさ。あ、セックスの相性いいとか？

咲希 ちよ、瑠美ちゃん！

彩 でも大事ですよ。

瑠美 うん、大事。

彩 どうなの？

咲希 どうなのって聞かれても。

瑠美 自分勝手なセックスしてんじゃないでしょうね、あいつ。

彩 確かに玲司くん、ムラありそうだけど、良いときは最高に楽しそう。

咲希 あのさ。

瑠美 どうだか。直輝くんは、丁寧なセックスしてくれそうじゃない？ 意外に良さそう。

彩 いやー、どうかな。セックスまで真面目すぎて飽きそう。

瑠美 飽きそう！ うける！

咲希 もー！ 二人ともきょうだいのセックス事情なんて興味ないでしょ？

瑠美・彩 ない(ね)。

彩 むしろ、考えると気持ち悪いわ。

咲希 ですね。

彩 じゃ、この話おしまい。違う話しよ！ ね！

咲希 てかき、もういっそ、子供つくっちゃいなよ。

咲希 は！？

瑠美 お、それいいね。

彩 子供いいよ。私妊娠して、ほんとそう思ったもん。咲希は良いお母さんになると思うし。

瑠美 それは私も思う。まあ、ありきたりだけどさ、ゴムに穴あけて。

彩 あ、私、穴開きたい。楽しそう。一緒にやりましょう。

咲希 そんなことしなくていいって。

瑠美 咲希ちゃん、子供作ろう！

咲希 いや、作らないし。それにもうそういうのやめようって思っただけで、思っただけでなかった訳だし。

彩 でも今日セックスしたんじゃない。

咲希 それはまあそうだけど……でも別にそういうつもりで行ったわけじゃなかったから。

彩 じゃ、どういうつもり？

咲希 きちんと薬飲んでるか確かめに。案の定飲んでなかったから、行って良かったよ。

瑠美 あいつ飲んでなかったの？ 何日？

咲希 二日だけだったから大丈夫だとは思っただけ。

瑠美 あいつは、ホントもうー。ごめんね、咲希ちゃん。いい歳だったのに、自分の管理位しろってな。

咲希 いや、今はきちんと薬飲んでるよ？ でも今回はハイパーグラフィアになっちゃったみたいで飲み忘れちゃったっていうか。

瑠美 あー、そうなんだ。

咲希 いつか玲司も、瑠美ちゃんみたいに寛解になるといいけど。

瑠美 だねー。玲司はまだかかりそうだけど。発症してから薬飲み始めるまでに随分かかったし。

咲希 ……。

彩 どういうことですか？

咲希 あー、発症してから治療してない期間が長ければ長いほど、治すのに時間がかかるの。

彩 そうなんだ。

瑠美 玲司のが私より先に双極なっただけで、誤診されて。双極だってわかったのは、私が双極なっただけだったから。

咲希 あ、そっか。瑠美ちゃん、I型だもんね。

瑠美 そー。I型はわかりやすいからねー。

咲希 何が一番ひどかったの？

瑠美 私は買い物衝動が一番ひどかったんだけど、一千万借金したよね。

彩 一千万！？

瑠美 そうそう。あれ不思議。いつの間にか契約書に判子押してんだよね。で、気付いたらすごい借金でさ。それでも全然焦らないし、お金まだあるって思っちゃうんだよね。借金膨らむばっかなのに。破産宣告する人とかも多いし、私はまだマシな方だった

よね。

彩 破産宣告！

瑠美 そうそう。家族もっててそんななってる人もいるから、大変だよね。

咲希 それで離婚までいっちゃったりね。

瑠美 ねー。あとは攻撃的にもなったりしてさ。私は実際殴ったりとか暴力的にまではならなかったけど、なんで私の言ってること誰も理解できないんだって傍若無人になつたよね。ジャイアンだよ、ジャイアン。いや、ジャイアンののが可愛いな。

咲希 ジャイアンって。

瑠美 でも社会的信用失うのはホント痛いよね。信用取り戻すのって本当時間かかるし。

咲希 そうだね……。

彩 玲司くんは瑠美ちゃんとは何が違うんですか？

瑠美 玲司はII型なんだけど、I型よりも躁が軽くでるから分かりにくくて、医者も鬱病と

誤診する奴らが多いんだよ。それで、違う薬飲まされて悪化！マジくそ医者ばっかだよ。

彩 悪化するんですか？

瑠美 悪化するねー。玲司なんて典型的なそれだから。

彩 はー、たまつたもんじゃやないですね。

でもそのあと良い先生と出会えてホント良かったよね。

瑠美 だね。つてそうだ、そろそろ病院行かないといけないんだった、忘れてたー。薬なくなる前に行かねばー。

彩 え、瑠美ちゃん、まだ薬飲んでるんですか？

瑠美 飲んでるよー。治つたかなーって思つて断薬したことは何回かあったんだけど、その度に再発しちゃつてさ。

咲希 双極はほほほ完治しないものね。

そうなんだ。

瑠美 そう。だから私は思つたわけよ。これは断薬するより、良い付き合い方を見つける方がいいってね。

彩 瑠美ちゃんは、その良い付き合い方ってのがわかつたんですね？

瑠美 だね。だいぶ時間はかかったけど。ま、コントロールできるようになったら全然平気よ。むしろ前より遅しくなつたと思うし。

咲希 すごいよね、瑠美ちゃんは。玲司はさ、まだ寛解までになつてないし、薬飲み忘れるとかホント怖いんだよね。

まーねー。

咲希 別に今回もハイパーグラフィアになるのが悪いって言ってるんじゃないよ。ほら、そ

うやって膨大な量を吐き出すことによつて落ち着くってあると思うし。でも玲司の場合、なつたらなかなか止まらないから。それで薬飲み忘れるとか、元も子もないよ。

彩 玲司くんの、そのハイパーグラフィア？ なんかすごいらしいね。直輝から聞いたけ

ど、字がぐつちやぐちやすぎて判読不能って、玲司くん本人も読めないんですよ？  
咲希が読めるの感心してたよ。

咲希 まあ、汚いけど全然読めるよ。

瑠美 私もハイパーグラフィアなつてるときの玲司の字は見たことないけど、あいつそもそも字汚いしなー。てかさ、直輝くん以外の他の編集さんも誰も読めないの？

咲希 ー、わかんない。もしかしたら読める人いるのかもしれないけど、誰にも見せたことないんだよね。

瑠美 見せたことない？ なんで？

咲希 見られたくないみたい。流石にあれ見たら何か気付くと思うし。双極だって、ばれたくないんだと思う。

瑠美 はー！？ なんでよ！ マジ意味わかんないんだけど！

咲希 わからなくもないんだけどね。

瑠美 ばれたところでなんだつーの。芸術家なんて精神疾患抱えてるやつ、いっぱいいるだろ！

彩 確かに。

瑠美 玉置浩二だって、マライアキャリーだって、ゴッホだって双極なんだから。

咲希 ゴッホは多分ハイパーグラフィアだったろうしね。

彩 やっぱそういうのも調べるんだ？

瑠美 自分が双極だってわかったとき調べた。

咲希 私も母親がわかったときにね。

瑠美 まあ、私だって最初わかったときは絶望したけどさ。人に知られたくなくとも思ったし。

彩 瑠美ちゃんもそういうときあったんですね。

瑠美 あったあつたー。見えないでしょー？

彩 見えないですね。

瑠美 てかさ、精神疾患の何がいけないんだってな。よくわかりもしないで変な偏見もつてさ。身体的に病気だったり障害もつてたりすると、皆かわいそうとか思うのに、精神病だつて言うとき「心が弱いせいだ」って。かー！ 脳の病気だつての。脳の病気！ 脳だつて臓器だかな！ たまに「薬に頼らない方がいいよ」とか言う奴らがいるけどさ、てめーは病気になったら薬のまねーのかよつてな！ 双極なんか症状によってはてんかんと同じ薬飲む場合もあるつてのにさ。てんかんの人にはそんな風には言わないんだよ、奴らは。勉強してから言いやがれつてな！

瑠美 てんかんと同じ薬飲む場合もあるんですか？

彩 双極もてんかんでも、脳の病気だからね。

彩 へー、そうなんですね。

咲希 それに最近、双極は遺伝も関係してるってわかってきたしね。

彩 え？ 遺伝も関係してるんだ？

咲希 うん。環境とかが原因でなる人たちも勿論いるけど、遺伝の多いみたい。確か八割とかだったかな？

彩 八割ってほとんどじゃん！

瑠美 マジか！ それは私も知らなかったわ！

咲希 正しい知識があれば偏見も減るのかもしれないけど、実際自分がなったり、身近な人がならないと、そもそも知ろうともしないよね。

彩 そうかもねー。

咲希 ていうか身近な人がなったとしても、その人が偏見で見られるのが嫌だからってオープンにしないこともあるだろうし。

瑠美 かー、ホント嫌な世の中だわー。

彩 瑠美ちゃんはカミングアウトしたとき抵抗あったりしたんですか？

瑠美 いや、全然。むしろ堂々と行ってやったよ。でも売れてないときにオープンにしたら仕事減るかもと思ったよ。

彩 あー。

瑠美 ま、だからこそ、売れっ子になったぜ！ ってときに言ってやったわけよ。

彩 ヒュー、かつこいー。

瑠美 でしょ！

咲希 瑠美ちゃんのそういうとこホント凄いつて思う。

瑠美 玲司もなー、吹っ切っちゃえば生きやすくなるのになー。いつまで引きずってんだか。……。

瑠美 あれだな！ こういうときはホスト行って憂さ晴らしするに限るな！

彩 好きですね、瑠美ちゃん。

咲希 結婚してたとき行ってなかったから、久々ホストだ？

瑠美 いや、昨日もう行ってきたよ！

咲希 はやつ！

瑠美 離婚成立祝いだね！ 暫く行けてなかった分、担当の男の子につきこんでやったわ！

咲希 いくら？

瑠美 5百万。

彩 さすが瑠美ちゃん。

瑠美 今日はどう一人のお気にの子のとこ行くかな！ まだいるかなー、りょうくん！

咲希 今日もつきこむの？

瑠美 まあ気分次第かな！

咲希 これはつきこむパターンだ。

彩 だね。

瑠美 咲希ちゃんも行くんだからね？

咲希 え。

瑠美 玲司なんかよりいい男いっぱいいるから。

咲希 いやいや。  
瑠美 うっし、気分良くなったし、トイレ行ってくるわ！  
咲希 ……えー。

瑠美、トイレに行く。

彩 相変わらずだね、瑠美ちゃん。  
咲希 ねー。  
彩 あ、そうだ、咲希。私、今日日本屋行ったんだけどさ。咲希、また小説書きはじめたの？  
咲希 え、なんで？  
彩 （鞆から「睡蓮」を取り出して）これ。  
咲 （彩から「睡蓮」を受け取って）これ？  
彩 これ、咲希だよね？  
咲希 ……なに、これ。  
彩 咲希、知らなかったの？  
咲希 うん。  
彩 買ったばっかだから読んでないけど、これっていつ書いたやつ？  
咲希 今年……。でもただ書いただけ。こんな出すつもりなかったし。  
彩 そうなんだ。  
咲希 ……。  
彩 ……どうしてそんな不安そうなの？  
咲希 ……玲司が読んだら、私だって気付くと思う。  
彩 気付いたら駄目なの？  
咲希 玲司とのこと書いたの、この小説。  
彩 玲司くんとのこと？  
咲希 うん……。  
彩 でも、咲希が出してないのに、どうして雑誌になんか載ってるんだらうね？  
咲希 ……。

メールの着信音が鳴る。

咲希 あ、ごめん。

咲希、鞆の中からスマホを取り出し、その画面を見て固まる。

彩 大丈夫？

咲希 ……うん、大丈夫。でも、ごめん。私ちよつと先帰ってもいいかな。

彩 うん、わかった。瑠美ちゃんには私から言っておくから。

咲希 ごめん。ありがとう。

彩 今度ランチ奢ってよねー。

咲希 わかった。

彩 落ち着いたら、連絡してよ。

咲希 ホントありがとう。

咲希、その場を立ち去る。

彩、咲希が行くの見送っては、テーブルに置いてある「睡蓮」を手にし、目的のページを見開いては読む。

間。

瑠美がトイレから戻ってくる。

瑠美 ごめんごめん。って、あれ？ 咲希ちゃんは？

彩 なんか仕事で急に行かなくちゃいけなくなったみたいで。瑠美ちゃんにごめんって言うっておいてって。

瑠美 そっかー、咲希ちゃんもいつそがしいなー。最近よく咲希ちゃんの名前、目にするもんね。「真鍋咲希」って！ なんか見つけると嬉しくなるよねー。って、それ何？

彩 あー、今日買って。瑠美ちゃん戻ってくるまで読んでようかなーって。

瑠美 へー。彩ちゃんも小説とか読むんだ？ あ、でも両親とも作家だったもんね。直輝くんも編集者だし。不思議じゃないか。

彩 母親は絵本作家ですけどね。

瑠美 あ、そういえば言ってたね。

彩 はい。

瑠美 でも、そっかー。咲希ちゃん帰ったかー。あ！ 彩ちゃん、これから一緒にホスト行く？

彩 え？

瑠美 もちろんお金、私出すし！ 飲み物だってお酒以外も結構あるしさ。彩ちゃんも、前は行ったことあるんでしょ？

彩 ありますけど。でも妊婦が行くってあれじゃありません？  
瑠美 大丈夫！ VIPルームとればいいし！ VIPルームだったら禁煙にできる部屋  
あるから！  
彩 え、そんなのあるんですか！？  
瑠美 あるある！ つわり酷かった時、外あんま出れなかったんでしょ？ 息抜きしない  
と！ ストレスは胎教によくないってな！  
彩 ははっ、そうですね。久しぶりに行っちゃおうかな。  
瑠美 そうこなくっちゃ！ 私の行きたいとこでいい？  
彩 もちろん。さっき言ってた、りょうくんのとこですか？  
瑠美 そー、もう今日はりょうくん気分だからさ！ 「キング」ってお店にいるんだけど。  
彩 え、「キング」！？  
瑠美 お、彩ちゃんも行ったことある？  
彩 いや、行ったことはないんですけど、もしかしたら知り合いいるかもなって。  
瑠美 そうなんだ。何知り合い？  
彩 （自分のお腹に視線をやって）父親かもしれない人の一人？  
瑠美 まじっす。  
彩 え、源氏名わかる？ 今日いるか聞いてみよつか？ いたら会いたくないよね？  
彩 あー、いいですよ。むしろ会うのは会場で面白いかも。  
瑠美 面白い？  
彩 自分がやらかしてしまった女が妊娠してたら、ひやっしてないかなって。  
瑠美 それいいね。すんごい面白そう。  
彩 ですよね！  
瑠美 よし！ もしいたら、その彼もつけちゃろ！  
彩 わー、なんか楽しくなってきた！  
瑠美 （立ち上がって）おっし、じゃあ今日は思いつきはっっちゃけよ！  
彩 （立ち上がって）はい、思いつきはっっちゃけます！

二人、ハケる。暗転。

## 第四場

講英社・会議室。

椅子に座って「追憶の海」を読んでいる東郷剛士。  
ノックの音。直輝が入ってくる。

直輝 失礼します。

東郷 (読んでいた本をデスクに置き) ジャスト十八時二十五分。さすがだな、折笠。

直輝 二十五分なんて細かい時間言われたらジャストで来ますよ。それで、話ってなんですか？

東郷 ああ。待ち会の件だが、才川先生は他の奴に任せるから、折笠には違うことを頼みたくてな。

直輝 違うこと？

東郷 ああ。

直輝 それって……。

東郷 今から来客あるから、とりあえずお茶用意してくれないか。来てからの話は早いから。

直輝 ……わかりました。

直輝、お茶を煎れにパーテーションの奥に向かう。

東郷、椅子の背にもたれかかり、目を閉じる。

そこにカツカツとヒールの音が近づいてくる。

東郷、音に気付きドアの方を見つめる。

咲希、ノックもなしにいきなり部屋に入ってくる。

咲希 どういうことですか、東郷さん。

東郷 咲希、ノックくらいして入って来い。それに約束の三十分よりまだ少しはやいじゃないか。

咲希 そういふのはいらないです。どういふことですか。どうしてあれが載ってるんですか？

東郷 俺が載せたから。

咲希 そうじゃなくて、何であの原稿——。

東郷 この前、お前の家に行ったときに見つけた。

咲希 ……この前？  
東郷 りささんの十三回忌の日。  
咲希 ……  
東郷 びつくりしたよ。また書き始めたんだって。  
咲希 ……  
東郷 まあ、咲希ならまたいつか書くとは思ってたけど。なんで書いたもの持ってこなかった？  
咲希 ……暇つぶしに書いたんですから。  
東郷 暇つぶしに？ そうじゃないだろ。じゃあなんで、りささんの仏壇のところに置いてたんだ？ りささんに読んでもらいたかったんだろ。  
咲希 ……  
東郷 そうなんだろう、咲希。  
咲希 ……確かにそういう気持ちもあつたのかもしれない。でも、何であれを「睡蓮」に載せるんですか？ 私はあれを本にしたかったわけじゃない。  
東郷 原稿で置いておくより、きちんと本にした方がりささんも喜ぶだろう。  
咲希 ……  
東郷 また書けよ。咲希、お前の書くものは人を惹きつける。直木賞のノミネートに入ったのだって、その証拠だろ。お前は書いた方がいい。  
直輝 (パーテーションから出てきて) 直木賞のノミネート？ 咲希ちゃんが？  
直輝 直輝君、どうして……。  
東郷 折笠、お前には咲希の待ち会についてほしいんだ。  
直輝 咲希ちゃんの待ち会？  
東郷 そう。待ち会。かがみ さき先生のな。  
直輝 かがみ さき……。  
咲希 ……待ち会なんてしなくていいです。私、辞退しますから。  
東郷 咲希！  
咲希 以前にもノミネートされてから辞退された方いましたよね。だったら私が辞退したって大丈夫でしょ。ですから、辞退の方向でお願いします。  
東郷 お前な——。  
東郷 東郷さんには感謝してます。小説家として書けなくなっただけから、私にライターの仕事を紹介してくださいって、こうして仕事できてるわけですから。でも、正直恨んだこともありました。そもそも私は小説家になんてなるつもりなんてなかったのに。「追憶の海」のときもそうでしたよね。勝手に載せて。  
東郷 あの作品を世に出さないなんて有り得ない。  
咲希 もう止めてください！  
東郷 ……  
咲希 私は小説家なんかじゃありません。誰かに何かを訴えたいわけでもない。ただ自分の

気持ち、想いを、書くことによつて整理してるだけです。ですから、書けつて言われたつて書けない。そんな私に小説家なんていう資格はないんです。

お前が自分でそう決めつけてるだけだ。あれから随分経つた。昔のお前とは違ふんだ。こうしてまた書けた。また書きたいことを書けばいい。

書きたいことなんてないです。

お前の中には燻つてる筈だ。言葉という言葉が。あの小説を読めばわかる。

……。

なんでその衝動を押しとどめるんだ。

……とにかく、辞退にしてください。私は賞なんてほしくない。失礼します。

咲希、部屋を出ていく。

直輝　　すいません、編集長。俺、追いかけます。

直輝、部屋を出ていく。

東郷　　「私は賞なんてほしくない」ね……。

直輝、咲希の背中を見つけて。

直輝　　咲希ちゃん！

咲希　　直輝くん……。ごめん、玲司の待ち会の仕事断つてもいいかな。

直輝　　それは構わないけど。

咲希　　ごめんね。

直輝　　ううん。……かがみ、さき先生、だったんだ。

咲希　　……うん。

直輝　　かがみつて、ペンネームか。

咲希　　加賀美は、母の旧姓なんだ。

直輝　　そうなんだ……。俺、かがみさき先生だと思つた。

咲希　　加賀のが苗字多いしね。それに文学界には、そつちで通してるし。

直輝　　……。

咲希

東郷さんがね、「追憶の海」を出したときにひらがなで「かが みさき」って書いて。あの時私まだ未成年だったし。一応気を遣ったらしいよ。だったら勝手に出すなって感じだけど。

直輝

そうなんだ。

咲希

うん。

直輝

……。

咲希

……聞かないの、何も？

直輝

いや。……大丈夫？ 咲希ちゃん。

咲希

優しいなあ、直輝くんは。

直輝

咲希ちゃんが思ってるほど、俺優しくくないよ。

咲希

そうなの？

直輝

うん、意外に計算してやってるときだってあるよ。

咲希

そうなんだ。

直輝

そうだよ。

間。

咲希

……私の母ね、編集者だったの、講英社の。

直輝

……うん。

咲希

東郷さんは母の部下で、私も中学生のときから面識あつて……母が亡くなって一人になった私に色々してくれたの。あのときは本当に東郷さんには支えてもらった……ちやうど芥川の待ち会の最中に、母が亡くなったって連絡が来て。芥川を獲ったなんてどうでも良かった。ただ母の側にいたかった……それで東郷さんが授賞式を欠席にしてくれて。それまで授賞式を欠席する作家さんはいなかったから、きつと色々取り計らってくれたんだと思う……賞を取って周りから注目されて、でもそんな余裕なんてなかった。全然整理できてないときに、書け書け……おかしくなりそうだった。期待の言葉が降りかかれば降りかかるほど書けなくなった。

直輝

……それで東郷さんにライターの仕事、紹介してもらったんだ？

咲希

うん。ちやうど母が亡くなって一年位経ったときにね。

直輝

そうなんだ。

咲希

うん。玲司はすごいよ。常に自分と向き合ってる。あんなに自分の心をむき出しにしなながら、どれだけ身を削ってるんだらうって。自分を傷付けながら、でも「生きたい」って、「生きてやる」って叫んでる。すごいよ、本当に……私にはそういう強さはなかった。

直輝

そっか……。

咲希 うん。……ありがとね。  
直輝 え？  
咲希 直輝さんと話したら、ちょっと冷静になれた。辞退したらそんなに注目もされないだろうし、玲司は他人の作品読まないから、あの作品を目にすることもないだろうし。  
咲希 ……玲司には見られたくないの？  
咲希 うん。あれさ、玲司とこと書いたんだ。だから、さ。  
直輝 あれ、玲司と咲希ちゃんのことなんだ？  
咲希 ……うん。  
直輝 そっか。  
咲希 ……。  
直輝 ……咲希ちゃん。  
咲希 何？  
直輝 玲司は読むと思う、咲希ちゃんのあの作品……。  
咲希 ……え？  
直輝 玲司、かが先生、じゃなくて、かがみ先生か……。  
咲希 かがでいいよ。  
直輝 うん。玲司、かが先生の作品好きみたいです。「追憶の海」を読んで小説書こうって思ったみたいです。  
咲希 ……。  
直輝 今日、咲希ちゃんが出てったあと、玲司に、他誰が候補あがってるか聞かれて。かが先生の名前出したら、すごい反応してさ。楽しませて、結果が出るの。かが先生と一緒に競えるってことが。  
咲希 ……そう、なんだ。  
直輝 ……玲司とこと書いたって、あの作品、俺はすごくあたたかくて優しい作品だったと思う。なんでそんなに見られたくないの？  
咲希 ……玲司にとって他人には触れてほしくないものが書いてあるから。  
直輝 触れてほしくないもの？  
咲希 ……まあ、でも私が思い込みすぎてるどころあるかもだしね！ うん！ 玲司が読んだら、そのとき考えるよ！  
直輝 ……そっか。  
咲希 うん。聞いてくれてありがと。私、締め切り近いのあるから、帰って仕事するね！  
直輝 うん、頑張つて。  
咲希 ありがと。じゃ、またね。  
直輝 また。

咲希、去る。

直輝、咲希が去るまでその背中を見続ける。  
咲希が見えなくなると、一つ呼吸をして、会議室に戻る。  
ノックの音。

直輝 すみません、席を外して。戻りました。

東郷 いや、構わない……咲希、どうした？

直輝 少し話して、今帰ったところですよ。

東郷 そうか。

直輝 はい。

東郷 咲希の母親のことも聞いたのか？

直輝 ……聞きました。

東郷 そうか。

直輝 はい。

東郷 ……あの人も、咲希の小説を読んだらきつと本にしたいって思う筈だ。

直輝 ……。

東郷 あんな才能を見過ごすなんて有り得ない。

直輝 ……。

東郷 折笠、咲希が言ったこと覚えてるか？

直輝 ……なんですか？

東郷 「私は賞なんてほしくない」って言ったんだよ、あいつ。

直輝 それがどうかしたんですか？

東郷 辞退しなかったら、自分が直木賞を取ってしまうかもしれないって思ったんだよ。自分でもわかってるんだろ。あの作品が賞を取る価値があるってことに。

直輝 ……。

東郷 辞退だなんて！ あいつはまた日の目を見るべきだ。お前もそう思わないか？

直輝 ……咲希ちゃんの作品は確かに文学界において唯一無二のものだと思います。

東郷 けれど、俺は編集長のやり方は間違ってると思います。

直輝 間違ってる？

東郷 はい。失礼ながら言わせてもらいますが、本人に許可なく勝手に作品を出すというのはどうかと。それにあの作品は……才川先生には見られたくないと言っていました。

直輝 才川先生か……。

東郷 はい。

直輝 それなら才川先生もきつと良いもん書くぞ。

東郷 はい？

直輝 才川先生は苦しめば苦しむほど、良いもんを書く。ふっ、楽しみだな。

東郷 ……。

東郷　なんて顔すんだよ……非情だって思うんだろ。だが、俺はどう思われようが構わない。  
文学界を盛り上げるためだったら何でもする。  
直輝　どうしてそこまで——  
東郷　とにかく咲希の辞退は許さない。折笠は咲希をなんとか説得しろ。  
直輝　俺にはできません。  
東郷　なら他のやつに頼むまでだ。  
直輝　！  
東郷　さすが頭の回転が速くて助かるよ。  
直輝　……。  
東郷　よろしく頼むよ。  
直輝　……失礼します。

直輝、部屋を出る。  
東郷、一つ溜め息をし「追憶の海」をそっと持つ。  
そしてしばし見つめると、その本を祈るようにおでこにつける。  
暗転。

第二幕 (十二月十八日)

第一場

昼過ぎ。

玲司の家。リビング。

ダイニングテーブルに玲司と直輝が向かい合って座っている。

原稿用紙を読んでいる直輝を、玲司が体を乗り出して見ている。

直輝、最後の一枚を読み終わると一呼吸し、原稿用紙を整える。

玲司 どうよ！

直輝 いいね。最高。

玲司 だろ！ さすが俺！

直輝 これで校閲入れるな。お疲れ様。

玲司 おー。

直輝 にしても早かったな。まさか本当に五日間で出来るとは。

玲司 調子いいぜ、いま俺。

直輝 みたいだな。

玲司 あ、咲希に書き終わったって言っといってくれな。あの続き書いてえし。

直輝 ……その前に連載の二話を完成させてほしいんだけどな。

玲司 それが、もう二話もできてんだな！

直輝 え、二話も！

玲司 おう。(隠していた原稿を出して) これこれ。

直輝 いや、スイッチ入るとホント早いよな、玲司は。まあ二話は持ち帰って後で読ませて

もらうよ。

玲司 おー、頼むわ。てことで、連絡よろしくな。

直輝 ……ああ、わかった。

玲司 あー、早く書いてえなー。途中から何書いたか覚えてねーから、原稿届くまで書けねーしなー。

直輝 ……。

玲司 ……どうした？

直輝 あー、いや……実は玲司に言わないといけないことがあってさ。

玲司 何？

直輝 待ち会の件なんだけど、もしかしたら俺、玲司の待ち会に行けないかもしれない。

玲司 まじで！？  
直輝 いや、まだ確定してはいないんだけどさ。  
玲司 そっか。  
直輝 ああ。  
玲司 まあ仕事とかなら仕方ねーけど、他のやつが来るってことだよな？ 気ー重いなー。  
直輝 ごめんな。なんとか玲司の待ち会に行けるように動くつもりなだけで。  
玲司 なんだ、じゃあ大丈夫だろ！ 直輝は昔っから仕事できっからな！ なんだかんだ片付くだろ。  
直輝 そんな出来る人間じゃないよ、俺は。  
玲司 俺には出来る人間の一人だよ、直輝は。  
直輝 ……でも本当にどうなるかわからなくてさ。どう動けばいいのかもわからないし。  
玲司 ……そうなのか。  
直輝 ああ。  
玲司 あ、そうだ！ 直輝に聞きたいことあつてさ！ かが先生の小説って、「睡蓮」の何月号に載ったんだ？ やっぱ読みたくなっちゃまってさ。咲希から原稿届くまで時間あるし読みてーんだ！  
直輝 あー、何月号だったかな……。  
玲司 ちよつと見てくれよ。んで、ウチに送ってくれると助かる。  
直輝 直木賞の結果出るまで待つんじゃなかったのか？  
玲司 あん時はそうだったんだけどさ、まあ気ー変わるよな。  
直輝 ……わかった。仕事溜まつてるから、すぐに送れなかったらごめんな。  
玲司 ああ。つてそうか、講英社行って貰ってくればいいのか。  
直輝 え？  
玲司 いや、最近書きっぱなしで、外出てなかったからさ。出前ばっかだったし、外で飯食いてーし、ついでに足のばすのもいいかなくて。  
直輝 そんな足伸ばすたって、ここから講英社まで一時間はかかるだろ。いいって、俺送るからさ。  
玲司 ……直輝、お前、どうしたんだよ？ いつもなら、俺が講英社に行くって言ったら賛成すんのに。  
直輝 いや、別に何も無いよ。  
玲司 ……。やっぱなー、そんないいのかー！ 別に大丈夫だって。元々直木賞とか興味ねーしさ。かが先生と同じ時にノミネートされたっただけでもすげー嬉しいし。自分のと比べて落ちこんだりなんてしねーよ。寧ろ衝撃受けるほどの作品なら読みたくてたまんねーよ！  
直輝 ……わかった。これから戻るつもりだったから、一緒に行こう。  
玲司 おう。ちよつと出る準備してくるわ。  
直輝 ああ。

玲司、寝室に行く。

直輝、手で頭を押さえ思索する。  
少しの間。

玲司、寝室から戻ってくる。

玲司

じゃ、行くか。

直輝

ああ。

二人、玲司宅を出る。  
場面転換の音楽。

## 第二場

音楽は流れたまま。

講英社。

玲司が一人時間を持って余すように立っている。

直輝、「睡蓮」を持って現れる。

それを見て、直輝に近寄る玲司。

直輝、少しためらいつつも、「睡蓮」を玲司に渡す。

玲司、直輝から「睡蓮」を受け取ると、すぐにページを捲り読み始める。

一分も経たずに玲司の顔から笑みが消えていき、ゆつくりと本から顔を上げ、表情の消えた顔で直輝の顔を見る。

直輝は何をするでもなく玲司のその視線を受け止める。

玲司、また「睡蓮」に目を落とし、ゆつくりと開いていた本を閉じる。

少しの間があった後、玲司はその場を後にする。

直輝、一瞬何かを発しそうになるも結局言葉が出てこず、ただ玲司の背中を見送る。

暗転。

第三幕(十二月二十三日)

第一場

昼過ぎ。玲司の仕事部屋。

玲司、身じろぎすることもなく、ただぼんやりと一点だけを見つめている。水のペットボトル、薬が入った袋、そして「睡蓮」が投げ捨ててある。

間。

そこに、ガツガツと部屋に入ってくる瑠美。

その後ろに付いてきている咲希。

瑠美 玲司！ あんたいつまでそうしてるのよ！

玲司 ……。

瑠美 五日もそんな塞ぎ込んでんだった？

玲司 ……。

瑠美 まあ、こうなったら暫くは戻れないのはわかってるけどさ……。

玲司 ……。

瑠美 ね、咲希ちゃんから聞いたけど、あんた薬まで飲んでないんだって？ 何も口にした

くないのかもしれないけど、薬は飲みな。今は鬱だからいいけど、躁になったらどう

すんの？ あんただってわかってるでしょ？

玲司 ……。

瑠美 折角ひつどい躁状態にはならなくなってきたってのに。あんた、何自分を破滅に追い

やってるのよ。

玲司 ……。

瑠美 咲希ちゃん、薬は？

瑠美、玲司の身体を起こす。

咲希、薬を拾い瑠美に渡す。

瑠美 (薬を取り出し、玲司に飲ませようとす) 飲み。

玲司 (瑠美から逃げるように離れ、弱弱しい声で) やめろよ……。

瑠美 ……喋る気力あんじゃん。

玲司 ……  
瑠美 あんたが薬飲むまで帰らないからね。無理やり飲まされなくなかったら、自分で飲みな。

玲司、気だるげに薬を飲む。

玲司がきちんと薬を飲むのを凝視する瑠美と咲希。

瑠美 ごめんね、咲希ちゃん。教えてくれてありがと。

咲希 ううん、そんな……。それより、良かった、薬飲んでくれて……。

瑠美 ……。

咲希 ごめんね、玲司……。

玲司 ……。

咲希 あんな風にさらすつもり、本当になかったの。

玲司 ……。

咲希 つて、こんな毎日言っつて、しつこいかもしれないけど。

玲司 ……。

咲希 玲司は嫌かもしれないけど、私明日も明後日もくるから。

玲司 ……。

瑠美 咲希ちゃん……。

咲希 ……。

玲司 ……面白いか？

咲希 ……え？

玲司 俺を見下して、そんな面白いか？

咲希 見下してなんか！

玲司 じゃあなんなんだよ。

咲希 私は――

玲司 今は何言われても、お前のこと信じられない。

瑠美 あんた、咲希ちゃんがどんなにあんたのこと！

玲司 ほつとけよ。

咲希 ……。

玲司 お願いだからほつといてくれ。誰とも話したくない。

咲希 ……玲司。

玲司 お前とは特に話したくない。

咲希 ……。

瑠美 あんたね――

咲希　ごめん！……私、帰るね。  
瑠美　咲希ちゃん……。  
咲希　……瑠美ちゃん、これ、鍵。……私、暫くここ来るのやめるね。  
玲司　……。  
咲希　玲司、これだけは言わせて。  
玲司　……。  
咲希　私が必要になったらいつでも呼んで。  
玲司　……。  
咲希　今は信用ならないかもしれないけど。でも、もしそうになったらいつでも呼んで。  
玲司　……。  
咲希　……。

咲希、部屋を出る。  
間。

瑠美　あんた、ほんとバカだね。  
玲司　……姉貴も帰れよ。  
瑠美　帰らないわよ。  
玲司　……。  
瑠美　咲希ちゃんがあんたを見下してるなんて、あるわけないでしょ。  
玲司　……。  
瑠美　ねえ、何で？　何で咲希ちゃんのあの小説読んで、そんなんなるの。むしろ私は咲希ちゃん  
玲司　の想いを知って泣きたくなったよ。  
瑠美　想い？　あれが？　ただ晒されただけだろ。  
玲司　あんたね——  
瑠美　だってそうだろ。人の心にずけずけ入ってきたかと思ったら、あんな小説のネタにする  
玲司　為だったなんて。ひでー女だよ。  
瑠美　ひでー女？　咲希ちゃんがネタにする為にあんたと一緒にいたって、あんた本当に  
玲司　そんなこと思ってるの？  
瑠美　じゃあ何なんだよ、あの小説は。  
玲司　そりゃあんたの痛いところばかり書いてあったかもね。でもね、逆に言ううとそん  
瑠美　だけあんたのこと理解してくれてるってことでしょ。理解した上であんたの側にずつ  
玲司　といたってことでしょ。  
瑠美　……。  
玲司　……。  
瑠美　咲希ちゃんは私たちに口にするとはなかったけど、最後まで読んだら咲希ちゃん

があんたをどう思ってたのかわかる。あんただって、あのラスト読んだらわかったでしょ？

玲司 ……最後まで読んでねーし。

瑠美 ……最後まで読んでない？

玲司 ……あんなの最後まで読む気になれねーよ。

瑠美 ……玲司。あんたは頑張ってるよ。最近の玲司は、きちんと生きていこうって、

玲司 そういう風に思ってるのわかる。

瑠美 ……。

玲司 生きようって、そう思えるようになった。それだけでも、あんたはすごい変わったよ。

瑠美 成長した。そりや今だって一生懸命自分を奮い立たせてるんだと思う。私だって寛解

してるっていつてもそうだし。……自分がまともだったら、病気じゃなかったらって

考えちゃうんだろうけど、あんたは大丈夫。支えてくれる人がいるでしょ、すぐ近く

玲司 に。

瑠美 ……。

玲司 信じて自分をさらけ出したのに裏切られるのが怖い？

瑠美 ……。

玲司 ……わかるけどね。でも、咲希ちゃんにはもうバレてんじやん。

瑠美 ……。

玲司 玲司。あんたは大丈夫。大丈夫だから。

瑠美 ……。

玲司 もう！ 玲司には幸せになってもらいたいんだから、私の分まで……私は駄目だった

たからさ、結婚。あんたが羨ましいよ、あんな想われてさ！ 私も咲希ちゃんみたいな

な彼女がほしいわ！ って彼氏か！

玲司 ……。

瑠美 玲司……これ、咲希ちゃんの小説、最後まで読みな。つらいかもしれないけど。……

私たちが、芸術家でしょ。芸術家ならわかるはずよ。途中で作品は完成しない。最後まで

で仕上げて完成なんだって。

玲司 ……。

瑠美 ……最後まで読んだらわかるから。大丈夫。

玲司 ……。

瑠美 ……ひとまず、今日は帰るわ。明日また来るから。

玲司 ……言葉が消えそうで怖いんだ。

瑠美 ……え？

玲司 あいつの……咲希の小説を読んだら。

瑠美 ……。

玲司 言葉が消えたら、世界が死んでいく……。咲希は、俺から言葉を消すんだ。俺には書く

くしかできないのに。

瑠美 書くしかできないって……。

玲司 ぬるま湯に浸かってたら、その水が肺にいっぱい入り込んできて、いつか水が詰まって窒息するんじゃないかって、息がでなくなるんじゃないかって……。書けなくなったら、俺はどうやって生きてけばいいんだよ……。

瑠美 玲司。咲希ちゃんのデビュー作、ちよっと名前忘れたけどさ。あの小説読んであんたは書こうって思ったんでしょ？ あんたに言葉という捌け口を覚えてくれたのは咲希ちゃんじゃないの？

玲司 ……。

瑠美 今日はまだ帰るけど……。玲司、くれぐれも変なこと考えないでよ。

玲司 ……。

瑠美 丸つきりその気持ちかわからないってわけじゃないけど……。生きてるだけでいいの。死なないだけでいいのよ。

玲司 ……。

瑠美 ……。

瑠美、静かに部屋を退室する。

瑠美が去った後、ゆつくりと「睡蓮」に視線を向ける玲司。

ゆつくりと暗転。

暗転しきると、救急車のサイレンの音が聞こえ、その音は徐々に大きくなっていく。

## 第二場

午後十七時頃。病院。

彩、ベットの上でお腹に両手をあて、うつむいている。  
ノックの音。

直輝が部屋に入ってくる。

直輝 ……着替え、持ってきた。

彩 ……ありがとう。

直輝 ……ここ、置いとくな。

彩 うん……。

直輝、椅子に座る。  
間。

直輝 母さん、来るの明日になるって。仕事で地方にいるみたいで。

彩 そう。

直輝 ……。

彩 ごめん、迷惑かけて。仕事、忙しい時期でしょ？

直輝 いや、そんな。大丈夫だって。

彩 仕事戻って大丈夫だよ。安静にしとけばいいだけだし。

直輝 ……ああ。

彩 ……。

直輝 ……彩、大丈夫か？

彩 だから大丈夫だって。全然元気に見えるでしょ？

直輝 ……。

彩 大丈夫だから、もー。仕事行きなっ。

直輝 ……いや、でも——

彩 もう、大丈夫って言ってるでしょ！

直輝 彩……。

彩 お願いだからほっといてよ。直輝のそういうお節介すぎるところ、堪らなくなる。

直輝 ……ごめん。

彩 優しさもあるってわかってるけどさ、でもそれで直輝は自分を保ってるでしょ。

直輝 え？

彩 玲司くんに対してがもろそうじゃん。玲司くんの為なんかじゃない。そうすることで、頼ってもらえることで、直輝はいられる。そうでしょ？

直輝 俺は――

彩 本当は玲司くんが羨ましくてたまらないくせに。

直輝 っ――

彩 コンプレックスがあつて堪らないでしょ。いつもそう、勝手にコンプレックス感じて、直輝は逃げてんだよ。編集者だって、玲司くんの才能を世に出すため？ 違でしょ。本当は自分が小説家になりたかったのに。父さんに「お前には才能がない」そう言われただけで書かなくなつてさ。私知ってるんだから。闘うこともせず逃げて、それで勝手にコンプレックス感じて。直輝のそういうところ、私ずっと嫌いだったんだよね。

直輝 彩にはわからないよ。

彩 は？

直輝 才能のある人たちばかりの中、一人平凡であることが。父さんも母さんも、玲司も、それに彩だって。俺はどうしたつて敵わない。

彩 そうだね。直輝は平凡かもね。才能のある人間の苦しみはわからないでしょうよ。

直輝 それは――

彩 それに才能才能言ってるけど、最初から皆才能があるだなんて、そんなの僅かでしょうよ。直輝はなんだかんだ自分ばつかで、相手が何を感じているかなんて見ようとしてないんだよ。

直輝 ……。

彩 いつまでそう逃げてるつもり？ それともずっと逃げ続ける？ まあ、もう三十年

直輝 以上そうしてきたんだから、今更無理かもただけどね。

直輝 俺だってわかってるよ、逃げてるのは！

彩 ……。

直輝 ……わかってるよ、そんなこと。わかってる……。

彩 ……ごめん、言い過ぎた。ただの八つ当たり。

直輝 いや、本当のことだよ、彩の言ったことは。

彩 ……。

直輝 ……ごめん、こんな時に。

彩 いや、私もごめん……。

間。

パタパタと足音が聞こえてくる。

瑠美、扉をノックすることもなく部屋に入ってくる。

瑠美 彩ちゃん、大丈夫？  
彩 ……瑠美ちゃん？ どうして？  
瑠美 直輝くんから連絡きて。ね？  
直輝 はい。  
彩 そう……。  
直輝 俺、今日は帰るよ。何かまた必要なものあったら、連絡して。  
彩 うん、わかった。  
直輝 ああ。  
彩 ありがとうね。  
直輝 ……うん。じゃあ、瑠美さん、俺お先に失礼します。来てくださってありがとうございます。  
瑠美 いや、いいって！ むしろ教えてくれてありがとうね。  
直輝 いえ。あ、明日俺が玲司のところ、行ってもいいですか？  
瑠美 え？ 勿論良いけど。  
直輝 ありがとうございます。  
瑠美 ううん。あ、じゃあ、これ鍵。  
直輝 はい。  
瑠美 ありがとう。よろしくね。

直輝、軽く会釈をして部屋を退室する。

瑠美 もー、彩ちゃん、大丈夫？  
彩 あの、直輝から連絡きたって、なんて？  
瑠美 こういふのは男より女性にいてほしいだろうからって。  
彩 ははっ、直輝らしいなあ。  
瑠美 ねー。ほんとそういうところ流石というか、直輝くんだよねー。まあ、咲希ちゃんには伝えてないみたいだけど。咲希ちゃんも今大変だしね。  
彩 ……ですね。  
瑠美 身体は？ 平気？  
彩 ちよつとズキズキするけど、まあ大丈夫です。  
瑠美 そう……。  
彩 直輝に当たっちゃいました。  
瑠美 当たっちゃった？

彩 はい。  
溜美 なんかよくわかんないけどさ、いいんじゃない、たまには。それに、直輝くんもわか  
つてるでしょ。  
彩 ……はい。  
溜美 もー、いいんだよ、こんなとき位。  
彩 溜美ちゃん……。  
溜美 弱ったときはとことん弱っていいんだって。その後また頑張ればいいんだから。ね？  
彩 無理しなくていいんだよ。  
溜美 ありがとうございます。  
彩 うん。  
溜美 でも、実はまだなんか実感ないところもあって。  
彩 うん。  
溜美 お腹を触ったら、あの子を感じられないから、そうなんだってわかるんですけど、で  
もなんか……。  
溜美 うん。

間。

彩 ……私、溜美ちゃんや咲希が羨ましかったんです。  
溜美 ……え？  
彩 人を好きに……愛することができて……私にはわからない感情だったから。  
溜美 ……。  
彩 ウチの両親も、世間には作家同士支えあってるみたいに見られてますけど、実際は仮  
面夫婦もいとこ。父親は遊びまくりで、母はただ見ないふりをして自分の理想を絵  
本につめこんでる。まあうまく隠してますけどね。  
溜美 そう……。  
彩 家族である直輝が気付いてないのはびっくりだけど。あの鈍感さと純粹さは、ある意  
味天才ですよ。  
溜美 確かにね。  
彩 同じ親から生まれたのにどうしてこうも違う人間になったのかって、たまに思うん  
ですよ。私はどんどん歪んでったから……。  
溜美 ……。  
彩 私、「好きだ、愛してる」だの皆が言ってるのが理解できなかったんですよ。てい  
うか意味がわからなかった。だってすぐに別れるじゃないですか？ 別れてなくて  
も浮気したりして。

瑠美 うつ、なんか心が痛いわ……………。

彩 あ、ごめんなさい。いや……………でも私、そう思ってたんですよ……………。はじめて男とセックスしたのだから、その日はじめてあった男とでしたけど「あ、これがセックスというものか」。そこそこ気持ち良いじゃん」って思ってた。それで色んな男と寝まくってたんですけど。彼女持ちやら妻子持ちやらわんさかいましたよ。もー、ホントわんさか！ なんか私面白くなっちゃって。結局皆きれいごとを並べてるだけなんだなって……………でも、咲希と仲良くなつて、愛つてあるのかなって思ってたんですよ。

瑠美 咲希ちゃん……………？

彩 はい。自分以外の女と遊びまくってるのを知つて、ずっと想い続けるって、すごくないですか？ 私ほんと理解できなくて。玲司くん、良い男でもないのに。

瑠美 ま、そうね。

彩 告白しては振られ、また告白しては振られ、もう何回も……………でも、お腹に赤ちゃんがいるってわかったとき、なんか自分の中に今までにない感情が生まれたんです。これが皆のいう愛なのかはわからないけど、でもこれがもしかしたら愛つていうものなのかもしれないって。こんな私にも愛せるものができるかもしれないって……………。そんなこと夢にも思わなかった……………。

瑠美 ねえ、彩ちゃん。私ね、彩ちゃんのその気持ちは愛だって思うのよ。

彩 ……。

瑠美 大丈夫。一度知ったら、きっかけを掴んだら。大丈夫だから。

彩 瑠美ちゃん……………。

瑠美 知ってる？ 愛を知らなかった人が愛を知ったとき、愛情深い人になるんだよ。

彩 そうなんですか？

瑠美 まあ、ならない人もいるけど。

彩 えー！

瑠美 でも、彩ちゃんなら大丈夫よ。

彩 ……はい。ありがとうございます。

瑠美 元気なったら、またホスト行つて憂さ晴らししよう！

彩 またですか？

瑠美 楽しかったでしょー？ この前。

彩 そうですね。楽しかったです。

瑠美 人生楽しまないと。

彩 ですね。

瑠美 うん。

彩 楽しみます、私。

瑠美 うん……………あー！

彩 え、どうしたんですか？

瑠美 お見舞い買ってきたのに、どっかに置いてきちゃった！

彩 彩  
瑠美

(声を出して笑う)

やっちまったな。

やっちまいましたね。

二人、笑いあう。

暗転。

第四幕(十二月二十四日)

昼過ぎ。玲司の部屋。

原稿用紙があちこちに散らばっている。

玲司、憑りつかれたように原稿用紙に鉛筆を走らせていたが、急に両手を耳にあて、どこか宙を見つめる。

宙を見つめたまま、いきなり大きな声で笑いだし、そしてまた憑りつかれたように鉛筆を走らせる。

その顔には狂気じみた笑みが浮かんでいる。

玲司

(書き続けながら) 焦らせんなよ。追いつかねえじゃねえか。

そして再度、大きな声で笑いだす。

笑い声が徐々に小さくなっていくと、自分の頭をぐしゃぐしゃと掻き回し、拳を作っては、自分の頭を思い切り殴りはじめ、また大きな声で笑いだす。

直輝、いきおいよく部屋に入ってくる。

直輝

玲司!?

玲司

(笑いながら) おー、直輝ー。

直輝

玲司、お前――

玲司

今俺、調子良いんだ。

直輝

調子良いって――

玲司

言葉が溢れて溢れて、今ならずと書いていられそうだ。

直輝

玲司、一旦落ち着け。

玲司

俺は落ち着いてるって。こんなに気分良いのなんてない。みてるよ、すぐにでも新作

あげつから。

直輝

玲司っ――

玲司

声が聞こえるんだよ。

直輝

声?

玲司

耳元で叫んでる。はっきり聞こえるんだ。それで文字が、言葉が、宙に飛び回ってき。

直輝

言葉が回ってるんだよ。

直輝

え?

玲司

見えるんだ。目の前に文字が。部屋中に言葉が飛び交ってる。

直輝

目の前？

玲司

目の前にある言葉が流れ込んでくるんだ、俺の頭の中に。

直輝

玲司、すっかりしろ！

玲司

文字が脳みそん中を回ってる。血液に溶け込んで、俺の全身を回ってくんだ。

直輝

玲司！

玲司

書かないと。追いつけなくなる。せつつくんだよ、俺に書け書けて、誰かが俺に叫

直輝

んでるんだ。

玲司

ここには誰もいないだろ！

直輝

俺には聞こえるんだ。この声が聞こえる内に書かないと。

玲司

正気になれ！

直輝

正気になれって？ 俺は正気だよ。何で直輝はこの声が聞こえないんだ？

玲司

俺だって、そんな声が聞けるなら聞いてみたいさ！ 玲司にはわかる筈もないだろ

直輝

うな、こんな気持ち。

玲司

こんな気持ち？

直輝

玲司には普通の感覚なんてわかんないだろって言ってるんだよ。

玲司

……普通？

直輝

ああ、そうだよ。

玲司

普通ってなんだよ。俺がおかしいって言いたいのかよ！

直輝

そんなこと言ってないだろ！

玲司

言ってるだろ！

直輝

だから——

玲司

俺はこういう風にしか生きてきてないんだ、俺にとってはこれが普通なんだよ。周り

直輝

から見たら俺はおかしいんだらうけどな。普通なんて、俺はその普通とやらを知りた

玲司

かったよ！

直輝

っ——

玲司

開き直るしかないだろ！ どうやって生きればいいんだよ！ 俺には書くしかない

直輝

んだ！

玲司

もう書かせてくれよ！ 頭が痛くなってきた。手を休めると痛みが襲ってくるんだ！

玲司、デスクに戻り、鉛筆を握りしめる。

直輝、玲司の手から鉛筆を奪う。

玲司

何すんだよ！ 俺を殺す気かよ！

二人、もみあう。

原稿用紙が二人の周りを舞う。

玲司、直輝を振り払う。

玲司

直輝まで俺を追い詰める気かよ！ 書かせろよ！ もう限界だ。頭が破裂しそうだ。

直輝

あの小説を読んでから、言葉が溢れてきて止まらないんだ！ 止めんよ！

玲司

あの小説？ 咲希ちゃんの？

直輝

あいつの名前を出すな！

玲司

勝手に解釈して苦しんでるのは玲司だろ！

直輝

やめろ！

玲司

なんでわかんないんだよ、あの小説を読んで！

直輝

やめろって言ってるだろ！

玲司

玲司じゃなきやダメなんだ！ 玲司、お前だつて咲希ちゃんを必要としてる。本当は

直輝

わかってんだろ！

玲司

やめろよ！ 頼むからやめてくれ！ ウジ虫が湧く。俺の脳みそ、頭の中の血管を。

直輝

ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる這い回る。やつらが血管をぶち破ってくる！

玲司！

直輝

やめろよ。(息が荒くなっていく) やめろやめろやめろやめろ——

玲司！？

玲司！？

玲司、発狂し頭を抱えその場に崩れ落ちる。

直輝、玲司に近寄る。

玲司

近づくな！

直輝、その場に止まる。

息を整えようとするも、なかなか落ち着いていかない玲司。間。

玲司

俺に近づくなよ！ これ以上、俺に触れるな！

直輝

……。

玲司 (浅い呼吸で) ……ホントに、やめてくれよ。息が……息ができなくなる……。  
直輝 ……。  
玲司 どうしたらいいのかわからないんだ……。俺にとって書くことは息をすることなんだ。窒息しそうな毎日が、書くようになって、ようやく息ができるようになったんだ。  
直輝 ああ……。  
玲司 でも書いてても、息が苦しくなるときがあつて……。どうしたらいいんだよ……。  
直輝 ……。  
玲司 普通に息ができれば……普通に息をしたいだけなのに……。  
直輝 ……普通に息できてるだろ。  
玲司 ……は？ 俺が？  
直輝 ああ。  
玲司 俺が普通にだなんて、そんなときあるかよ。  
直輝 あるって。  
玲司 いつだよ。  
直輝 鬱でも躁でもないときあるだろ。  
玲司 ……わかんねえ。  
直輝 俺といるときも、息できてなかったのか？  
玲司 ……。  
直輝 じゃあ、咲希ちゃんといるときは？  
玲司 ……咲希？ (嘲笑して) 余計にわかんねえよ、もう……。  
直輝 もう？  
玲司 ……。  
直輝 ……。  
玲司 俺と関わっても、あいつが幸せになれるとは思えない……。  
直輝 それを決めるのは玲司じゃないだろ。  
玲司 ……。  
直輝 ていうか「俺と関わっても幸せになれると思えない」って……。バカだなー。それ、関わってほしくて仕方ないってことだろ。  
玲司 ……。

直輝、落ちている鉛筆を取りに行つて、玲司に差し出す。

玲司 ……なんだよ。  
直輝 書けよ。  
玲司 ……え？

直輝 書くことしかできないんじゃないかと、書くことでしか伝えられないだけだろ。  
……。  
玲司 玲司がいつまでもそんなじゃ、咲希ちゃんもいつかどこか行くぞ？  
……。  
直輝 そうだな、例えば俺とか？  
玲司 ……は？  
直輝 いや、それは絶対ないけど。  
玲司 なんなんだよ……。  
直輝 ……本当不器用だな、作家って。俺には到底できないわ。早々に諦めて正解だったよ。  
玲司 ……諦めて？  
直輝 玲司には言ったことなかったけど、俺も小説家目指してたんだ。  
玲司 ……。  
直輝 玲司の小説読んで諦めたんだけど。ま、逃げたんだな、俺。  
逃げた？  
直輝 本当は嫉妬しくってたんだよ。才川玲司になりたくてたまんなかった。  
玲司 ……直輝は自分にあってるものを選択しただけだろ。それって逃げになのか？  
……。  
直輝 つーか、俺になりたいって、お前、頭おかしいだろ。  
直輝 ……そうだな、俺も少しおかしいのかもな。  
玲司 いや、少しっていうか大分おかしいだろ。  
直輝 ……そっか。  
玲司 マジ意味わかんねーし。俺は折笠直輝になりたかったつーの。  
直輝 ……知ってる。  
玲司 ……お前、マジなんなんだよ。

直輝、無言で持っていた鉛筆を再度玲司に差し出す。  
玲司、暫くその鉛筆を見つめた後、直輝の顔を見る。  
そして落ちている原稿用紙を拾い集め、それをゴミ箱に捨て、デスク脇に投げ捨てられていた「睡蓮」を手に取り、じっと見つめる。

玲司 ……伝わると思うか？  
直輝 ……伝わるに決まってるだろ。あの咲希ちゃんだぞ。

玲司、直輝の方に振り向き、直輝の手からその鉛筆を取る。

デスクに向かい新しい原稿用紙を取り出し書き始めようとするが、ハツとして立ちあがる。

直輝

どうした？

玲司

薬飲まねーと。

玲司、床に転がっていた水のペットボトルと薬を拾い、薬を飲む。そしてもう一度デスクに向かい書き始める。

玲司

……直輝。

直輝

何だ？

玲司

……これ、書き終わったら届けてくんねーかな。

直輝

……ああ。すぐに届けるよ。

暗転。

第五幕（十二月三十一日）

昼過ぎ。玲司の仕事部屋。珍しくその部屋は片付いている。

原稿に向き合っている玲司。

が、落ち着かない様子で、すぐに書くのをやめ、スマホで時間を確認する。

また鉛筆を持ち書こうとするが、すぐにその鉛筆を置く。

玄関の扉が開く音。

しばらくして咲希が部屋に入ってくる。

その手には原稿用紙が入った茶封筒を持っている。

咲希 ……久し振り。

玲司 ……おー。つーか久し振りって、まだ一週間とかしか経ってないけど。

咲希 そっか。そんなもんだっけ。

玲司 そんなもんだよ。

咲希 あ、ごめんね、ちよつと遅れちゃって。

玲司 いや、さつき起きたばっかだったし、ちよつど良かった位。

咲希 そっか、なら良かった。

玲司 おー。

咲希 ……。

玲司 ……お天気、どうですか？

咲希 ……晴れ（その日の天気）ですけど。

玲司 へー。

咲希 （くすりと笑う）

玲司 なんだよ。

咲希 なんでもないよ。

玲司 言いたいことあるなら言えよ。

咲希 だからなんでもないって。

玲司 あっそ。

咲希 ……コーヒー飲む？ って間違えた、コーヒー牛乳。

玲司 いらない。つーか、一言多いし。

咲希 だってあれ、コーヒー牛乳じゃん。

玲司 あんな苦いもん、飲み物じゃねーし。

咲希 飲み物だし。玲司がお子様なだけだから。

玲司 別に飲めないわけじゃねーし。甘い方が好きってだけで。

咲希 そうだね。

玲司　そーだよ。  
咲希　……。  
玲司　……。  
咲希　……これ。原稿、昨日直輝くんから渡してもらった。  
玲司　おー。  
咲希　うん。  
玲司　……読んだ？  
咲希　読んだ。  
玲司　そっか。  
咲希　うん。  
玲司　……。  
咲希　良い小説だね。  
玲司　おー。  
咲希　……。  
玲司　それだけかよ。  
咲希　いや、なんか、玲司が書いたって信じられなくて。  
玲司　なんでだよ。  
咲希　良い意味だよ。  
玲司　そっか。  
咲希　うん。  
玲司　……。  
咲希　……これ、打ち直しする？  
玲司　……いや、しなくていい。出版するつもりないし。  
咲希　そうなんだ。良い作品なのに。  
玲司　いや、なんつーか、その……これははじめて自分の為じゃなく書いたっつーか。  
咲希　……うん。  
玲司　人の為に書いたっつーか。  
咲希　うん。  
玲司　……お前、わかってんだろ。  
咲希　何が？  
玲司　……なんでもねーよ。  
咲希　そう。  
玲司　……つーか、お前。直輝から聞いたけど、なに直木賞辞退するとか言ってたよ。  
咲希　え。  
玲司　そーゆーつまんねえことすんなよ、マジで。  
咲希　つまんないことって。てか、話題変えようとして――  
玲司　書かないとかいうなよ。

咲希 ……  
玲司 次書かないとかないから。  
咲希 ……なんで。  
玲司 書きたいんだろ、ホントは。  
咲希 ……。  
玲司 お前、バレバレだから。  
咲希 ……。  
玲司 まあ、あのタイトルのセンスはどうかと思うけどな。  
咲希 は？  
玲司 いやー、あれはねーよ、マジで。  
咲希 玲司だって人のこと言えないと思うけど。  
玲司 あ？ なんだって？  
咲希 別にー。てかさ、この小説タイトルついてなかったけど、決めてないの？  
玲司 ……あー。  
咲希 決めようよ、玲司の抜群のセンスで。それにタイトルつけないなんて、作品がかわい  
玲司 そう。  
玲司 いいんだよ、あれは。  
咲希 えー。  
玲司 俺がいいつつつてんだから、いーの。  
咲希 センス悪いって言われるのが嫌なの？  
玲司 コーヒー。  
咲希 え？  
玲司 やっぱ飲む。淹れて。  
咲希 決めたら淹れるよ。  
玲司 んな簡単に決められつかよ。  
咲希 ……本当は？  
玲司 は？  
咲希 本当は決まってるんでしょ。  
玲司 ……。「息のできる場所」。  
咲希 ……。「息のできる場所」。  
玲司 ……なんだよ。  
咲希 何も言っていないよ。  
玲司 くそつ。  
咲希 ……良いね。  
玲司 ……おー。  
咲希 ホントに。すごく良いと思う。

咲希、原稿用紙をそつと抱きしめる。  
ゆっくりフェイドアウト。

幕